

南房総市に残る発射台跡

戦火の記憶

ちば戦後70年 遺構は語る

(中)



桜花の発射台の跡の上に立つ愛沢さん(左)と佐久間さん。細長いコンクリートは約100mにわたる＝南房総市下滝田

新型桜花の出撃準備

のどかな田園風景が広がる南房総市下滝田地区の山中。野菜や果物が植えられた畑の中を、100mにわたる細長いコンクリートが

終戦を迎え、この場所から桜花が出撃することはなかったが、唯一残った無機質なコンクリートだけが、その恐ろしい計画の存在を静かに伝えている。桜花が初めて開発されたのは、1944(昭和19)年。当時の初期型は、飛行機の下につり下げて敵艦近くまで移動した後に切り離し、搭乗員もろとも体当たりする様式だった。終戦までに約750機が生産されたが、多くの若い命が散った。それでも、軍は「肉弾」の効率化を図った。45(昭和20)年、米軍の本土上陸が現実味を帯びてくると、軍は「最後の切り札」作戦の準備を急いだ。「新型桜花」の開発。飛行機を使わず地上から発射できるように、改良を目指したのだ。

「陸上発射式なら、沿岸部に停泊した米軍艦を直接攻撃できる。効率が良いと考えたのだろう」。市内の歴史などを研究するNPO法人「安房文化遺産フォーラム」の愛沢伸雄代表(63)

りする様式だった。終戦までに約750機が生産されたが、多くの若い命が散った。それでも、軍は「肉弾」の効率化を図った。45(昭和20)年、米軍の本土上陸が現実味を帯びてくると、軍は「最後の切り札」作戦の準備を急いだ。「新型桜花」の開発。飛行機を使わず地上から発射できるように、改良を目指したのだ。

基地建設で少年兵ら犠牲



寺の境内に放置されている鉄骨。発射台のレールに使用される予定だった＝南房総市下滝田の「知恩院」

と振り返る。桜花を敵の飛行機から守る掩体壕(えんたいこう)の工事は過酷なものだった。「つるはしやシャベルで、ひたすら洞窟を掘り進めていたらしい。地響きのようなダイナマイクの音がほぼ毎日聞こえた。当時は、特攻基地を造っているなんて考えもしなかった」(佐久間さん)。

工事は終戦当日まで続き、朝鮮人労働者の姿も多々見られた。佐久間さんは「崩落で亡くなった人もいる。辛くて怖い思い出の場所、今も近寄りたくない」と語り、「若い命を使い捨てにする特攻などんでもない」と憤る。愛沢さんは「(作戦の目的が)本土防衛、というのは建前。実際の狙いは戦後交渉を有利にするため、敵艦を一隻でも多く沈めておくことだった。命を軽視するむい作戦。幻に終わったが、その陰で犠牲になった人も多く、忘れてはいけない悲劇」と表情を引き締める。

同地区の寺「知恩院」には、基地で使用されるはずだったレールの一部が忘れ去られたように放置されている。さびた鉄骨に触れ、愛沢さんは静かに語る。「これも立派な負の遺産。昔、この穏やかな街で、何が行われようとしていたのか。二度と戦争を起こさぬよう、後を生きる者がしっかりと語り継いでいかないと」